

第3班

海外神社跡地から見た景観の持続と変容

(1) 共同研究員名

研究代表者：津田良樹

共同研究者：泉水英計、中島三千男

研究協力者：稲宮康人、金子展也、辻子実、渡邊奈津子

(2) 研究目的

戦前期において大日本帝国は海外に獲得した植民地に神社を創設した。それが海外神社であり、その数は2,000箇所ともいわれている。敗戦とともに、ほとんどの神社は破壊されたが、未だに遺構を残しているものもある。

神奈川大学21世紀COEプログラムの共同研究（第3班・課題3）として、「環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読」に取り組むなかで「海外神社（跡地）調査データベース」を構築し、公開した。さらに非文字資料研究センターに移行してからも、毎年このデータベースの増補改訂を続けている。また、このデータベースの成果を基盤として、在野の研究者なども含めた「海外神社研究会」を立ち上げ、研究会を継続している。

本共同研究は、この「海外神社研究会」を母体として、景観の持続と変容の観点から、海外神社跡地の現地調査を行い、海外神社のかつての様相、および戦後の持続と変容について実態解明することを目的とする。それぞれの海外神社（跡地）の実態解明することのなかから、海外神社研究の総括が見えてくるのではないかと考えている。

(3) 活動経過

〈2011年度研究経過〉

共同研究の初年度に当たる2011年度は、9月に研究員・研究協力者に橘川俊忠を加えた総勢6人の共同調査を台湾で行った。マイクロバスをチャーターして西岸を南から北にかけて効率よく、網羅的に回ることができた上、問題意識の共有化も図ることができた。また、2012年3月には津田・橘川・馬興国は旧満洲の長春の満州国建国忠霊廟や建国神廟の調査を行った（ニューズレター『非文字資料研究』No.28参照）。なお、台湾の海外神社調査の主な内容は以下の通りである。

台湾の神社跡地調査からみた共同研究の今後の展望

新たに始まった共同研究『海外神社跡地から見た景観の持続と変容』の初めての共同調査を9月18日から9月24日にかけて台湾において実施した。調査は初日の18日に台湾に入国するや、一気に台湾の南端に近い高雄まで下り、そこから北上しつつ神社跡地を巡ることにした。台湾をフィールドとし台湾の海外神社に明るい金子展也氏を案内役に翌19日から神社跡地調査を行った。私にとっては初めての台湾でもあり、行くところ行くところが新鮮で興味深い体験に満ちた旅となった。行程を記せば以下のようである。

19日：旧高雄神社（高雄市）・旧阿緱神社（屏東市）・旧佳冬神社（屏東県佳冬郷）・霊聖堂（屏東県東港鎮）・旧橋子頭社（高雄県橋頭郷）・旧開山神社（台南市）・旧第1次台南神社（台南市）・旧第2次台南神社（台南忠烈祠）。

20日：旧嘉義神社（嘉義市）・林内神社（雲林県斗六市）・田中神社（彰化県田中鎮）・員林神社（彰化県員林鎮）。

21日：第1次台中神社（台中市）・第2次台中神社（台中忠烈祠）・能高神社（南投県埔里鎮）・醒靈寺・日月潭玉島社（南投県魚池郷）。

22日：新竹神社（新竹市）・霊穩寺（新竹市）・通霄神社（苗栗県通霄鎮）・桃園神社（桃園市）。

23日：台湾神社：台湾神宮（台北市）・台湾護国神社（台北市）・金瓜石社（新北市）。

24日：建巧神社（台北市）。

その間、神社跡を巡り、さらに神社の遺物が移転残存する場所にも足をのぼしたため、ハードなスケジュールであった⁽¹⁾。

台湾における神社跡地の第一印象は、これまでに実施した韓国や旧満洲国の神社跡地調査の知見からすれば、台湾の多くの神社跡地には残される遺構が多く、跡地以外に移され残る石灯籠・狛犬・神馬など遺物も多いことである。社殿や付属建物がそのまま残る場合もあるほか、建物はなくなっているが、かつての様相をよく伝えている場合もある。それどころか、近年になって復原工事が行われ、かつての神社時代の様相に戻した上で、忠烈祠に再利用されている場合もある。それら台湾における神社跡地の状況を踏まえ、今回の調査で気付いた点、今後の課題などについて、以下に記しておきたい。

① 佳冬神社

佳冬神社は、高雄よりさらに南の高雄州屏東県佳冬郷佳和路（旧所在地：東港郡佳冬庄佳冬）に位置する。昭和11（1936）年に鎮座し、能久親王、開拓三神（大国魂命・大己貴命・少彦名命）・天照皇大神を祭神とする無格社であった。境内の規模はさほど大きくない。跡地の現状は一直線に配された奥行き100mほどの参道の入口付近に一ノ鳥居や神橋が残り、参道両側には石灯籠の基礎らしき石が残る。奥に進むと中ほどに二ノ鳥居の右側の柱が残り、さらに進むと三ノ鳥居の亀腹のみが残っている。突き当りには本殿が置かれていた間口4mほど、奥行き7mほどの基壇が残る。基壇には正面に8段の石段が取りつき、階段上には四ノ鳥居が立つ。基壇上

の奥まった位置に本殿の礎石も残っており、間口が 1.5 m ほどの流造の本殿が建っていたのではないと思われる。以上のように旧境内地からかつての様相をうかがい知ることができる。参道脇の小屋の中や、傍らには奉納者名や年紀が刻まれた石灯籠の棹部分が置かれている。また、当社の狛犬は近所の国立佳冬高級農業職業学校に移されて、その出入口両脇を飾っている。跡地の地勢や残された遺物などを総合すればかつての様相を復原することが十分可能な例であるといえよう。

② 霊聖堂

屏東県東港鎮船頭里の霊聖堂は神社ではないが、興味深い宗教施設として取り上げたい。地元の台湾人自らが、戦死した日本人の将兵を祀るものである。この霊聖堂の場合米軍によって撃沈された艦船の日本軍将軍および兵士の霊を祀っている。さらに将軍の娘であり兵士のいいなずけでもあった日本人女性が、父やいいなずけの死を悼み非業の死を遂げたということで、この女性の霊もまた祀られている。霊聖堂は掃除も行き届き、線香なども絶やさず供えられており今もなお信仰が生き続けている。日本軍人の亡霊を鎮めるために始まったといわれるが、台湾人が単に亡霊を鎮めるためだけに、日本軍人の霊を祀っているとも考えがたい。今もなお信仰が生き続く台湾人の精神的・思想的背景を深く掘り下げてみる必要があるのではないと思われる。なお、この種の日本人の霊を祀っている堂が霊聖堂ばかりでなく他にも数箇所あるという。⁽²⁾

③ 嘉義神社

嘉義神社は嘉義の市街地の東のはずれ嘉義公園内（嘉義市東区公園街）に位置する。大正 4（1915）年の鎮座で、大正 6 年に県社に昇格し、さらに昭和 19（1944）年に国幣小社に列格した。現況は、元の神社入口付近に社号碑の表面一皮分を削り取り「台湾県嘉義市忠烈祠」と刻みなおした石柱が残り、幅広の一ノ石段を登ると左右に狛犬が安置されたままになっている。東西に延びる参道を進むと第二ノ石段に至り、石段を登ると戦後に造られたであろう中国風の石造の門が立つ。両脇に石灯籠が並ぶ一直線に延びる参道沿いの右側には木造の社務所・斎館、校倉状に造られたコンクリート造の軀体に木造屋根を掛けた祭器庫が神社時代のままだに残る。一方、左側には参集所、手水舎も残っている。さらに進むと左側に参道に対し直角に折れ曲がった第一次嘉義神社の参道があり、第一次嘉義神社の拝殿の礎石、その奥には本殿の基壇が残されている。第一次の参道を曲がらずにさらに進むと第三ノ石段があり、その奥には平成 6（1994）年まで第二次の社殿が残っていたが、いまは射日塔という展望台に代わっている。⁽³⁾

嘉義神社は中心となる本殿・拝殿はないが、神社時代の建物が多数残っており、社号碑・狛犬・多数の石灯籠などの遺物も多い。そればかりではなく、第一次、第二次の嘉義神社が軸線を直交させて重なっており、第一次、第二次において、嘉義神社の様相がどのように持続・変容しているのかを確認する上でも貴重な遺構だといえよう。

④ 林内神社

林内神社は林内駅の南方 600 m ほどの山の裾野（雲林県斗六市林内郷）に位置する。昭和 15（1940）年の鎮座で、能久親王・開拓三神・豊受大神を祭神とする無格社である。駅から中生路を南西に進み鈍角に左折するとコンクリート製の大きな一ノ鳥居が残っている。さらに進むと下の石段に突き当たり、石段を登り切れば二ノ鳥居があり、左右に石灯籠も残る中段である。さら

に上の石段を登ると右前方にかつての拝殿・本殿跡地に戦後に建てられた中国風の廟の建物が建つ上段である。上段は小高く林内郷を見渡すことができる。以上のように鳥居・石段・石灯籠などの林内神社当時の遺物が残るほか、かつての地勢などがよくわかる。無格社とはいえ、なかなか規模の大きな神社であったようだ。

この神社調査で特筆できる点は新たな資料の発見であろう。中段の東側に位置する林中国民小学の渡り廊下には林内神社時代の古写真が展示されている。古写真の出典を尋ねたことが切っ掛けで、林中国民小学の向かいにある私立淵明国民中学から古写真のデータを提供していただけることになった。さらに紹介いただいた林内国民小学では卒業アルバムなどから林内神社の古写真を発見することができた。このように、地元において丁寧な調査を行えばまだまだ新たな資料を発掘することが充分可能であることを示す事例である。

⑤ 桃園神社

桃園神社は神社時代の様相を極めてよく伝えていることでよく知られている。現在の状態は単に残ったというだけではなく、積極的に神社時代の様相に復原した結果である。この桃園神社は昭和 13 (1938) 年の創立で、戦後昭和 21 (1946) 年に新竹県忠烈祠とされ、行政区分が桃園県になるや昭和 25 (1950) 年に桃園県忠烈祠となっている。忠烈祠は本来、辛亥革命・抗日戦争・中共との戦いで戦死した人々の霊を祀るところで、日本の靖国神社に相当する場⁽⁴⁾とい⁽⁴⁾いい。そのような忠烈祠に日本時代の神社をそのまま使用し、かつ修理復原を加えてまで保存をはかる、台湾人の精神構造についても検討する価値があると思われる。

⑥ 霊穩寺

⁽⁵⁾
霊穩寺は、新竹神社が戦後廃止された際に新竹神社から石灯籠や手水鉢など多数の石造物を移し、境内の各所に配置した寺である。運ばれた石灯籠は 30 基以上におよび、神社時代の様相のままに使用されている例が多い。石造物に刻まれた刻銘も他の神社などではモルタルを上塗りしたり、文字面を削り取るなどして全面的に消されるほか、特に昭和などの年号は必ずとい⁽⁵⁾いいほどに消されている。ところが、当寺においては「奉献 新竹州農会」(下線の字は消されている)「創建二十五年記念、昭和八年十二月十六日」のごとく行政区分が変更した箇所のみ消され、その他はそのまま残されるような例が多い。現在とは異なり、戦後間もなくの重機もない時期にこれだけの石造物を移転させ、それを寺の各所に配置するというエネルギーはなになのだろうか。また、刻銘をあえて消さない理由もあるのであ⁽⁵⁾ろうか。このような事象の背景を探ってみる必要があると思われる。

⑦ 台湾神社・台湾神宮

台湾神社は、能久親王および開拓三神を祭神とする台湾の総鎮守として、明治 33 (1900) 年に創建された官幣大社である。その後、社殿老朽化を理由に新社殿造営が計画され、昭和 19 (1944) 年 6 月 17 日に天照大神を増祀し、台湾神宮に改称した。ところが新社殿への遷座祭の 2 日前の昭和 19 年 10 月 23 日、日本旅客機の事故により炎上したとされる。新社殿跡地も旧社殿地の東側の山懐に造営されたとされるが、炎上したこともあり、その上情報統制されたためであ⁽⁵⁾ろうか実態はよくわかっていない。戦後には、台湾神社跡地は圓山大飯店となり、社殿跡地などにホテルの大規模な建物が覆いかぶさり神社時代の様相はほとんどわからなくなっている。一

方、新社殿跡地も圓山大飯店の分館などの建物が建てられ不明だとされてきた。ところが、今回の調査で新社殿跡地においては、日本独特の筋塀や礎石の一部さらには地下遺構を確認することができた。それら遺構や戦後間もない時期の米軍による航空写真などを総合して検討すれば、新社殿について、位置の確定・全容の解明も不可能ではないと思われる。

以上7件は大きく見れば、2つの観点に集約できよう。①③④⑦は神社跡地の景観の持続と変容についての検討であり、②⑤⑥は地元台湾人の神社も含めた宗教・精神・思想の背景をさぐることであろう。共同研究の残る期間のなかで、以上のような点を踏まえテーマを絞り込みながら解明できればと考えている。(ニューズレター『非文字資料研究』No. 27より転載)

〈2012年度研究経過〉

○現地調査

2012年度は研究協力者の辻子実が韓国、稲宮康人が南洋群島、金子展也が台湾屏東県と、それぞれの関心のもと独自の海外神社調査を行った。2012年2月には津田良樹・橘川俊忠が奈良天理の宮大工(仲徳次郎)が中国大陆で造営した南京神社・徐州神社などの跡地調査を行い、さらに、3月には津田良樹・金子展也が昨年度に引き続き台湾の台湾神宮や新化社跡地の地下神殿遺構などの調査を実施した。台湾・中国大陆の調査についてはニューズレター『非文字資料研究』No. 30を参照願いたい。

○研究会など

2012年度の大きなイベントは『帝国後 海外神社跡地の景観変容』の共通タイトルのもとに公開展示・公開研究会を実施したことである。公開展示としては研究協力者の稲宮康人の写真展「帝国後 海外神社跡地の景観変容」を2012年12月11日～20日にかけて神奈川大学セレストホールホワイエで開催した。その展示会にあわせ公開研究会「帝国後 海外神社跡地の景観変容——台湾の事例を中心に——」を実施した。國學院大學の菅浩二氏、神奈川大学の中島三千男・津田良樹が報告を行い、コメンテーターとして台湾師範大学の蔡錦堂氏をお招きした。公開展示および公開研究会のあらましは以下の通りである。そのほか、5月26日(土)には班内の研究会として「台湾神社の創建と鎮座祭およびその例祭における時代背景と催し物の変容」というテーマで金子展也の報告を中心とした研究会を行った。

『帝国後 海外神社跡地の景観変容』(公開展示・公開研究会)について

神奈川大学非文字資料研究センターの共同研究プロジェクト「海外神社跡地から見た景観の持続と変容」班は、非文字資料研究センターの公開展示として稲宮康人写真展『帝国後 海外神社跡地の景観変容』を2012年12月11日(火)～20日(木)にかけて神奈川大学16号館ホワイエにおいて開催した。また、この写真展開催期間中の12月15日(土)に『帝国後 海外神社跡地の景観変容——台湾の事例を中心に——』として公開研究会を実施した。

戦前期に「大日本帝国」が海外において植民地化した旧台湾・旧朝鮮・旧樺太・旧南洋群島や

旧満洲国を中心とした中国の侵略地に創設した神社が海外神社である。その数は 1,640 社に上るとされているが、敗戦とともにすべての神社で機能は停止し、多くは現地人や日本人の手によって破却された。

公開展示である写真展は、「海外神社跡地から見た景観の持続と変容」班の研究協力者であるフリーランスのカメラマン稲宮康人氏によるもので、氏が共同調査の中、あるいはそれ以前から撮りためた海外神社跡地の景観に関わる写真を中心にすえ、神社時代の古写真を添えたものであった。内容は戦前期に海外で造られた神社で、伊勢神宮を頂点にした神社機構のなかで社格を付与された神社の現在の景観を中心としたものである。研究センターの共同調査として行った台湾の神社跡地調査の成果も反映させ、海外神社を全体と部分の両面から眺めることが意図されていた。さらに、日本国内の戦前期に創建された靖国神社や樫原神宮などを併せて展示することにより、今日の日本社会のなかに潜在している神社と歴史との関係性についても問題提起するものであった。ところが、海外神社の現状の景観写真のなかに国内の神社の写真を混入させての展示は、必ずしも意図を明確に伝えられたかどうか、単純に海外神社のなかになぜ国内神社が混在しているのかとの疑問を生じさせることにもなった。展示の配列やキャプションに適切な工夫が必要だったのではないかと反省される。それでも、マイナーなテーマである上、街中から外れた大学内のホールのホワイエでの開催という悪条件にもかかわらず 150 名ほどの見学者があった。

なお、公開展示図録は『日本写真年鑑』2013 年版（日本写真協会）に収録された。

公開研究会は、國學院大學の菅浩二氏の「台湾神社宮司・山口透と寺廟」、神奈川大学の中島三千男氏の「歴史・文化の三度の造り替え——台湾明延平郡王祠、旧開山神社を素材に——」、津田の「台湾神社から台湾神宮へ」の 3 本の報告に、コメンテーターとして国立台湾師範大学台湾史研究所の蔡錦堂氏を迎え、法学部の橘川俊忠氏の司会で実施された。

菅氏の報告は、台湾総督府下における海外神社と在地の寺廟の関係についての報告であった。すなわち台湾神社宮司を創設以来 36 年間務めて 1937 年に引退した山口透（翌 38 年死去）の思想と、時期的には山口引退後にあたる 1939 年に中壢郡守として寺廟全廃計画を推進する宮崎直勝の論理の検討である。山口の引退がいわゆる「皇国臣民化」政策が推し進められるちょうどその時期に当たっているとの認識の上で、山口は終始一貫して在地の信仰すなわち祠廟を尊重する姿勢を持ち続けたとし、その対極に宮崎の寺廟整理を位置づけている内容であった。

中島氏の報告は、鄭成功の廟であった明延平郡王祠（旧）が、開山神社と改変され、戦後明延平郡王祠（新）として復活する変遷のなかに、歴史・文化の創り替えを読み解こうとするものであった。明延平郡王祠の元は鄭成功を祀る開山王廟という現世利益的なものであったが、清王朝のナショナリズムの下にまず明延平郡王祠（旧）が造られた。その明延平郡王祠（旧）が日本の植民地支配の下に開山神社とされた。神社とはなったが当初は建物には大きな改変はなかったが、昭和 16（1941）年皇民化ということで日本の神社建築風に大きな改変が行われた。さらに、日本の敗戦後、国民党政権の下で、台湾支配の正当化として明延平郡王祠（新）が再建されるというような内容であった。

津田の報告は、台湾の総鎮守であった台湾神社から台湾神宮への昭和造替・遷座の様相を『台湾日日新報』などの文献資料により跡付け、さらに現在ではまったくわからなくなってしまった新

社殿の様相を古地図・航空写真・現地調査をもとに検討した（詳細は、年報『非文字資料研究』第8号参照）。また、現地調査により発見した新社殿の遺構である地下神殿（御神体の避難施設）について紹介し、同様な事例が旧満洲国の建国神廟にも存在することなどについて報告した。

これらの報告について、蔡氏よりそれぞれにコメントがあった。主なコメントの内容は以下のようである。

菅報告に関しては、宮崎郡守の寺廟整理の評価について、宮崎の狙いは財産目的であり、彼の論理は寺廟整理を正当化する単なる口実であったのではないかとの指摘がされた。

中島報告に関しては、戦後になって明延平郡王祠（新）において神式の儀式が、戦前期に神職の訓練を受けた台湾人によって行われた事実が指摘され、その事実をどう解釈すべきかが問われた。

津田報告に関しては、台湾神社で発見された地下神殿と同様な地下施設が台南県の新化神社でも見つかったとの紹介があり、新化神社は昭和18・19年ころに造られており、台湾神社や満洲国建国神廟の造営期ともほぼ一致している。時期的に見て、空襲に備えた防空壕のようなもので、この時期の神社には他の神社にもあったのではないかとの指摘があった。

蔡氏からは、以上のほか新たな資料の提示や今後の課題などについての指摘もあり、それらを巡って活発な議論が行われた。また、大里浩秋主任研究員から飛び入りで台湾神社の新出の写真資料の紹介があり、当日参加いただいた元台湾神社宮司山口透氏の孫に当たられる山口坦氏御夫妻から山口透に関するお話をいただけるなど多彩な内容となった。

とはいえ、司会の橘川氏の締め言葉にあったように、台湾に限ってもまだまだ問題を多く残しており、いまだ一般論として成立するような状況に至っていないことが確認され、海外神社研究の一般論に至るにはさらに一つ一つの神社の実態を解明する努力を積みかさねる必要がある。また、海外神社という日本の過去の姿をプラス面、マイナス面を含めて明らかにすることにも大きな意味があると思われる。

なお、公開展示・公開研究会については、『神社新報』（2012年11月26日付）や『週間金曜日』で案内記事が掲載され、公開研究会の当日の様子が『中外日報』（2012年12月20日付）で紹介されるなどの反響があった。（ニューズレター『非文字資料研究』No.30より転載）

〈2013年度研究経過〉

○現地調査

5月には中島三千男・森武鷹が霧社事件に関連する霧ヶ岡社・川中島社祠などの台湾中部の海外神社の調査を行った。11月には辻子実が韓国の麗水・巨文島の神社調査、稲宮康人がミクロネシアの旧トラック諸島において都洛神社・春島神社の調査を行った。また、津田良樹・金子展也・坂井能久が台湾の軍の営内にあった営内神社や専売局構内にあった神社などを中心とした調査を行うとともに、公開研究会の打合せなどのために台北芸術大学や成功大学を訪問した。

○研究会など

7月には中島三千男の近著の合評会「中島三千男著『海外神社跡地の景観変容——さまざまな現在』をめぐって」を橘川俊忠をメイン報告者として著者参加のもとに行った。また、3月末には公開展示・公開研究会を行った。テーマは『海外神社とは？ 史料と写真が語るもの』である。公開展示は、史料展示として古写真・絵葉書・絵画資料・図面などをもとに各地の海外神社の神社時代の実像に迫るとともに、跡地の現状写真などを対比的に展示した。また、跡地の現況については研究協力者でフリーランスのカメラマンである稲宮康人氏の独自の写真コーナーを設けて、カメラマンの眼をとおして見た跡地の景観についての写真展を併せて行った。公開研究会は、台湾の事例を中心として3名、朝鮮の朝鮮神宮を事例とした1名の報告があった。それぞれの内容は下記のようなものであった。

黄士娟氏（台北芸術大学）は、「台湾の神社とその跡地について」の題目のもと、戦前期の台湾への神社の進出を初期（1895年—大正初期）、中期（大正初期—1931年満州事変）、後期（1931年満州事変—1945年植民地統治終結）に分けて解説し、戦後の変容過程を、各地方の需要による神社跡地の用途変更期（1945—1985年）、中華文化的観光を目的とした改築期（1964—1985年）、神社の文化財指定期（1985年桃園神社事件—現在）として説明された。

津田良樹は、「台湾神宮の消長と地下神殿」の題目のもと台湾神社の改称・増祀と航空機事故による新社殿への遷座の頓挫と終焉への顛末、さらに戦後の変容過程や台湾神宮や新化神社などに残る地下神殿の諸相について報告した。

諸葛衍氏（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士前期課程）からは、「解放後の朝鮮神宮の解体とその跡地利用について」の題目の下、戦後朝鮮神宮跡地すなわち南山という場所が韓国人にとって象徴的な意味を持つ地であり、時の政権によりさまざまな形で利用されてきた経過を中心に報告があった。

林承緯氏（台北芸術大学）は、「戦後台湾における神社の処理政策と金瓜石神社の再利用計画について」というテーマで、戦後台湾における神社建築の処分政策と政策後の跡地の様相について、および金瓜石神社跡地の再利用計画とその活用実態についての報告があった。

これらの報告を受け活発な質疑応答があったが、特に金瓜石神社跡地の再利用については熱い議論が戦わされた。なお、公開研究会参加者は59名、公開展示の入場者は233名であった。

（4）研究成果

共同研究『海外神社跡地から見た景観の持続と変容』に関連して、この3年間に刊行された著書・論文等は以下の通りである。なお、最終報告書を年度末には刊行する予定である。

津田良樹、「海外神社跡地から見た景観の持続と変容」、ニューズレター『非文字資料研究』No. 26、2011年7月

津田良樹、「台湾の神社跡地調査からみた共同研究の今後の展望」、ニューズレター『非文字資料研究』No. 27、2012年1月

前田孝和、「樺太の神社の終戦顛末」、ニューズレター『非文字資料研究』No. 27、2012年1月

津田良樹、「台湾神社から台湾神宮へ——台湾神社昭和造替の経過とその結果の検討——」、年報

『非文字資料研究』第8号、2012年3月

辻子実、「台湾侵略神社跡地のヤスクニ」、年報『非文字資料研究』第8号、2012年3月

金子展也、「台湾神社の創建と祭典時の催し物の変容」、年報『非文字資料研究』第8号、2012年3月

津田良樹、「旧満洲国国都新京（長春）の海外神社跡地調査」、ニューズレター『非文字資料研究』No. 28、2012年7月

金子展也、「台湾神社の創建と祭典時の催し物の変容」、ニューズレター『非文字資料研究』No. 29、2013年1月

辻子実、「海外神社跡地調査（韓国）・麗水神社」、ニューズレター『非文字資料研究』No. 29、2013年1月

金子展也、「台湾屏東県の原住民集落に建立された神社（祠）の現状」、ニューズレター『非文字資料研究』No. 29、2013年1月

中島三千男、『海外神社跡地の景観変容——さまざまな現在』、御茶の水書房、2013年4月

稲宮康人、「稲宮康人写真展 帝国後 海外神社跡地の景観変容」、ニューズレター『非文字資料研究』No. 30、2013年7月

津田良樹、「『帝国後 海外神社跡地の景観変容』（公開展示・公開研究会）について」、ニューズレター『非文字資料研究』No. 30、2013年7月

中島三千男、「歴史・文化の三度の創り替え——台湾明延平郡王祠、開山神社を素材に——」、ニューズレター『非文字資料研究』No. 30、2013年7月

菅浩二、「『台湾神社宮司・山口透と寺廟』」、ニューズレター『非文字資料研究』No. 30、2013年7月

橘川俊忠、「中島三千男著『海外神社跡地の景観変容——さまざまな現在をめぐって』」、ニューズレター『非文字資料研究』No. 31、2014年1月

橘川俊忠、「新郷・徐州・南京神社跡地現地調査報告」、ニューズレター『非文字資料研究』No. 31、2014年1月

津田良樹、「台湾における海外神社跡地調査」、ニューズレター『非文字資料研究』No. 31、2014年1月

中島三千男、「台湾中部の海外神社跡地を訪ねて」、ニューズレター『非文字資料研究』No. 31、2014年1月

稲宮康人、「旧トラック諸島の神社跡地」、ニューズレター『非文字資料研究』No. 31、2014年1月

研究成果報告書、『海外神社跡地から見た景観の持続と変容』、2014年3月刊行

中島三千男、「歴史・文化の三度の創り替え——台湾明延平郡王祠、開山神社を素材に——」

金子展也、「北白川宮能久親王の御遺跡と神社の造営」

渡邊奈津子、「福州神社、厦門神社、鄭成功関係遺跡調査報告」

辻子実、「侵略神社跡地調査・巨文島・大田・仁川」

坂井久能、「管内神社・陸軍墓地から見た霧社事件死没軍人の慰霊」

津田良樹、「台湾神宮の消長と地下神殿の諸相」

稲宮康人、「神社跡地の撮影を続けるにあたって——今後の撮影予定地と中国・韓国・ミクロネシアの神社跡地報告——」

黄士娟、「台湾の神社とその跡地について」

(5) 今後の課題と展望

限られた期間、限られた予算での共同研究であった。とはいえ3年間を一区切りとしての事業である以上一応の総括をしておかねばならない。海外神社は、限られた地域、限られた時間に成立したものであり、限定された事象である。しかし、敗戦とともに国内においても、国外においても多くの関係資料は抹殺され、遺構もまたほぼ破壊しつくされたとみてよかろう。そのため、海外神社の全貌を把握することは難しい状況にある。それでも、神奈川大学21世紀COEプログラムのなかで、海外神社跡地の景観変容に取り組んで以来、多くの資料を収集し、可能な範囲で現地調査を続けてきた。その成果として、収集した資料の多くはデータベースとして一般に公開することに努め改定を重ねている。また、現地調査の成果は先に示したように、逐次発表してきた。

とはいえ、未だ海外神社の全貌が見えない状況にあり、その跡地がいかなる変容を遂げ、その背景はいかなるものであるかを明らかにするまでには至っていない。総括になるべき最後の公開展示・公開研究会のタイトルを『海外神社とは？ 史料と写真が語るもの』とせざるを得ないことから到達点が察せられよう。公開展示・公開研究会の簡単な趣旨説明として書いたものが、以下の短文である。

公開展示・公開研究会『海外神社とは？ 史料と写真が語るもの』について

戦前期において大日本帝国が海外において植民地化した旧台湾・旧朝鮮・旧樺太・旧南洋群島や旧満州国を中心とした中国などの侵略地に日本人は神社を創設した。それらが海外神社であり、その数は1,640箇所にもものぼるとされている。敗戦とともにほとんどの神社は現地人や日本人自身の手によって破却され、その機能はすべての神社で停止した。

神奈川大学非文字資料研究センターの共同研究班「海外神社跡地から見た景観の持続と変容」では3年間（2011年度～2013年度）の共同研究終了の区切りとして、『海外神社とは？ 史料と写真が語るもの』との共通の表題で、公開展示・公開研究会を実施することにした。

公開展示は、史料展示として古写真・絵葉書・絵画資料・図面などをもとに各地の海外神社の神社時代の実像に迫るとともに、跡地の現状写真などを対比的に展示することによって戦後の神社跡地の景観変容についても考えたい。

また、跡地の現況については研究協力者でフリーランスのカメラマンである稲宮康人氏の独自の写真コーナーを設け、カメラマンの眼をとおして見た跡地の景観についての写真展を併せて行う。

公開研究会は、『海外神社とは？ 史料と写真が語るもの——台湾と韓国の事例を中心に——』とサブタイトルを追加し、台湾・韓国の海外神社の研究者にお集まりいただいて、両国における海外神社の様相や戦後の神社跡地の変容過程について報告をいただく。さらに、地域によって当

然異なるであろう跡地の処分過程や変容の社会的背景などについても議論したい。

見えるようで見えない海外神社の姿が、仄見えてくる公開展示・公開研究会になればと考えている。

最後の公開展示・公開研究会をこの期の一応の総括に代えたい。なお、公開研究会の内容についてはニューズレター『非文字資料研究』（No. 32、2014 年 7 月）に掲載予定である。

注

- (1) 高雄忠烈祠には高雄神社の狛犬、宝覺寺には台中神社の石灯籠、醒靈寺には能高神社狛犬・石灯籠というように、旧神社からの遺物が移転残存する例が多い。
- (2) 同行した研究協力者の金子展也氏が確認した範囲でも、苗栗県獅頭山勸化堂、嘉義県東石郷副瀨村富安宮、台南市安南区鎮安堂飛虎將軍廟があるという。
- (3) 嘉義神社の社殿は 1994 年火災で焼失するまで忠烈祠として使用されていた。
- (4) 台湾護国神社はじめ、前記の嘉義神社など忠烈祠に転用される例は桃園神社以外にも多い。
- (5) 新竹神社跡地は現在不法入国者の新竹収容所として使われている。社務所・斎館など神社時代の建物が今も残っている。収容所となっているため通常見学は難しいが、幸いにも今回特別な計らいで、収容施設以外の部分の見学が許可された。